

「今日はおもしろい」。向き合つて両手をつなぎ、二人でその場を一廻りする。

「七五三」二人向き會つて止まり、お互に両手を三回打ち合はせ、「んー」の時、各自三拍手する。

「ポックリポコ〜音がする」はじめの様に、二人並んで両手を交又して組み、スキップで、圓周にそつて進む。

二番

「ポックリちろろん鈴が鳴る」。一番の「ポックリポコ〜音がする」と同じ動作。

「長いたもとに」。その場に止り、二人向き合つて各右手をとり、高く上げて、その下を一人づゝ交代でくぐる。

「赤い下駄」。一番の「七五三」と同じ動作。

「ぼつくりちろろん鈴が鳴る」。一番と同様、二人手を組み、スキップで圓周に沿つて進む。

觀察

近くの學校、文房具

これは學校ごつこに就いてその遊びの中でする觀察である。がそれと別に、何かの機會に注意してし度いことである。兄弟達が行つてゐれば時々その機會もあらうけれどさうでない子ども達も多い時、やがては行くかも知れない學校といふ處へ親しみと、淡い可愛い、憧れともいへるやうな氣持を深めるやうな意味で、

清水光子

學校で運動會をしてゐる時見にゆくとか、お庭へ遊びに行かせてもらふとか、體操をみせてもらふとかして近づくことはいゝ事だと思はれる。そしてその折々に學校へ行く子達の作法を知らせたり見せたり、話したりも出来るであらう。文房具に就いても同じやうな氣持で扱へることと思ふ。この頃から何でも大切に用ふ習慣をこんな機會からでもぜひつけ度い。

落葉

掃除といふと殊更めくけれど庭一ぱい散る落葉を子ども達と楽しんで集めたり、寄せたりする。保姆がまめに動いてその中で子ども達に手傳つてもらふといふ風にし度い。木を仰いで「すつかり散つたのね」「枯れてしまつたの」「いゝえ、ほら、こゝに小さなこぶみたいなものあるでせう、こゝに來年の葉つばが小さくたゝんで大事にしまつてあるの」「來年はつば出てくるの」「出てくるでせうね」などいふ會話をし乍ら。そして集めた葉を許さればたく。その灰は畑に入れる。又たかすに堆肥にする。「こやしにしませうね」といふ程度に話すので特別な説明はしない方がよいであらう。

煙

特別に書く迄もないけれど、落葉をたいたりなどし乍らそのにほひをかいだり、けむいことを経験したり、煙がもくもく出てもない時吹いて煙を出してもえる所をやつて見せたりする。あまり火に近づけないやうに呉々も氣をつけて。木の葉の時や、わらの時や、木の時や石炭の時など煙の色や匂に氣をつけさせる。

又煙の流れ方にも注意し度い。

双六

種類や内容については他の處で書かれる事であらうから省くが遊び方として、まだよくのみこめない子ども達もあらうから遊び乍ら説明する。さいころの丸の數と同じだけ先へ進むといふ簡単な數處理をすることで、敬観念へ正しく導くやうにし度いことである。

談話

志村貞子

明治節 大東亞戰爭下、大稜威輝く昭和の大御世に、このおめでたい日を迎へ、明治天皇の大御業を、昭和の大御世を擔ふ光榮の子等と共に仰ぎ奉り、讀へまつることの辱さ、有難さに私は胸がいばいになる。そしてまた、大稜威のもと、天皇を輔翼し奉つて大御世に生を享くるの光榮を辱しめなかつた我等の父祖の忠勇に感謝と感激の念を新たにすると共に、父祖の心を受け繼ぐべき自らを省み、更に光榮の子等に心を籠めて祈らずにはゐられぬのである。私はこの自分の心持でそのまゝ子供等に向はうと思ふ。話さうと思ふ。祈らうと思ふ。光榮の子等は日本人である。必ずや私の拙い言葉からも感じてくれるであらう。日本人の有難さをよるこびを、そして日本人の祈りを。

事、皇室の御事に對し奉る時、語るものゝ態度、言葉の如何で

あらねばならぬかは申すまでもない。それらから子等の心情、態度は自ら養はれるのである。充分に心すべき事である。

國引き この話は出雲國風土記に據つたものである。我國民の雄大且明朝瀾達なる性情を誠によく表はしてゐるものと思ふ。原文に據つて充分に味はれることが希ましいと思ふ。因みに國引の様を書いたところをみると、「童女の胸鉏取らして、大魚の支太衝き別けて、はたすき穗振り別けて、三自の綱打ち桂けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそるに、國來國來と引き來繼へる國は云々」とある。これを四度繰返して「國引き訖へ」給ふたのである。この構想、この高い調子の味ひを失はぬやうに、そのまゝに子供達に傳へたいものである。これを爲し得る時は、子供達の爲の上代日本の話として優れた一つの話になると思ふのである。私共の試みた國引の話は當協會發行の幼稚園談話集の第二輯に載せる豫定になつてゐるので大方の御叱正をいたさうと思ふ。なほ御承知のことと思ふが國民學校のヨミカタ三の十三頁、三 國引きも御参考になさるのがよいと思ふ。

見えなくなつたお椅子 繪のお帳面 これは何れも幼稚園談話集の第二輯に載るもので、幼児身邊の生活に取材したものである。見えなくなつたお椅子の話は、物を亂棒に取扱ふ一人の男の子を中心に、その子供（淳ちゃん）の幼稚園の椅子が夜そつとぬけ出して淳ちゃんのお家にゆき、お家のお道具と相談して淳ちゃん悪い癖をなほしたといふお話。表はれてくる道具類の描寫もいきいきしてをり、話する者も聞く者も共に楽しめる話である。物を粗末に扱ふ子供は多いものであるが、この種の話がそれに及ばす效